

株式会社ラクト・ジャパン
2020年11月期 決算説明会 主な質疑応答（要約）

開催日	2021年1月21日（木）
出席者	代表取締役社長 三浦 元久 取締役 前川 昌之

Q： 現在高水準にある国産脱脂粉乳の過剰在庫解消のタイミングをどう見ているか。いつ頃になれば、在庫が捌けて輸入調製品の需要が回復してくるのか。

A： 2020年度（2020年4月～2021年3月）の過剰在庫対策は官民挙げての対策で効果を期待しているが、在庫調整の進捗状況によっては来年度（2021年4月以降）も改めて対策が打たれる可能性もある。対策実施と在庫削減にはタイムラグがあるので、効果ははっきり表れてくるのは年度後半となるだろう。通常夏場は、飲用、アイスクリーム向けなど脱脂粉乳の需要が高まる時期でもあり、対策の効果と需要増により、当社の下期（2021年7月～11月）には在庫の平準化も進むのではないかと考えている。

国内の脱脂粉乳在庫は民間企業（乳業メーカー）が持っている在庫であり、脱脂粉乳や一部の輸入調製品で国産への置換えの影響があるのは主に大手乳業向け販売となる。それ以外のいわゆる一般市場については、引き続き調製品を中心とした輸入製品の需要は大きく、変わらない見込み。よって、下期、国内の脱脂粉乳在庫の削減効果が出てくれば、乳業メーカーの需要も戻り、国産への置換えの影響があった脱脂粉乳や一部の輸入調製品の需要も回復してくるものと考えている。

Q： 新中期経営計画の3年後の目標数値は、1年遅れといえども引き続き成長路線にあるという前提の目標だと理解した。コロナ禍というイレギュラーな要素と、近年順調な国内生乳生産を踏まえると、事業環境は変わってきているようにも見えるが、改めて、ラクト・ジャパンが強みを発揮して成長していける背景を説明してほしい。

A： ご指摘の通り、このところ国内の生乳生産は増加傾向にある。しかし、国産原料だけで乳製品の需要を賄うことはできず、輸入による補完が必要な構造は変わらない。また、乳原料には、生乳の乳価に由来する内外価格差という決定的な要因があり、これを埋めることも構造上難し

い。こうした状況の中で、当社のお取引先である各メーカー様においては、コスト面から輸入原料の利用が必須であると考えている。チーズについても、国内市場の8割以上が輸入品であり、やはり輸入品の利用が必須と言える。こうした構造は今後も変わらず、国内事業の長期的な成長は十分見込めるものと考えている。

加えて、国内で健康をキーワードとした新商品開発など新たな展開を加えていることや、アジア事業の展開で成長を目指しているため、引き続き成長路線は継続しているものと考えている。

Q： 新規事業として立ち上げた機能性食品原料事業の進捗はどうか。想定通りに進捗しているか。

A： コロナ禍という特殊要因があったので、販売強化の戦略に若干の方向転換はあった。インバウンド需要の喪失の影響が大きかった美容業界向けの販売は、想定通りとなっておらず、その点の進捗の遅れはあった。そこで健康・美容産業、スポーツニュートリションといった新たな業界で販売先を開拓するより、既存のお取引先に機能性食品原料を提案していくことを優先しており、実績も上がっている。

以上

本資料は、フェアディスクロージャーの観点から、決算説明会の質疑応答をもとに作成しております。内容につきましては、ご理解いただきやすいよう一部で加筆・修正しております。また、その情報の正確性・完全性を担保するものではなく、今後予告なく変更される可能性がありますことをご承知おきください。